

江戸時代の神埼

佐賀藩統治と藩境争い

講演者 西九州大学講師 森 周蔵氏



旧神埼町に296人の武士



伊東玄朴旧宅



佐賀の蘭学への道

安永3年（1774）、杉田玄白が翻訳書「解体新書」を著したのがきっかけで、蘭学が急速に広まっています。佐賀では、18世紀中ごろから蘭学や西洋医学の流入が確認できます。宝暦7年（1757）に小城藩の医者が藩主に外科学修行のため長崎留学の伺いを立てた資料が残っています。佐賀藩全体では多くの医者が18世紀中ごろには長崎で修業していたと思われます。

さて、伊東玄朴ですが、寛政12年（1800）神埼の仁比山村の農民、執行重助の長男として生まれ、名を勘藏といいます。数え13歳で近所の僧侶に漢学を16歳のときに近くの古川左庵に漢方医学を学びます。向学心に燃える玄朴は佐賀にいた島本良順からオランダ語の手ほどきを受けます。やがて良順の知人の長崎・安禅寺の寺男として働きながらオランダ通詞の猪俣伝次右衛門の塾で蘭学を学びます。

文政7年（1824）シーボルトが長崎で鳴滝塾を開くと、玄朴もこに入塾。そのシーボルトが江戸に

シーボルトの門人に



直正公嗣子淳一郎君種痘之図

命がけて最新医学拓く

佐賀の蘭学を強く勧めたのは古賀穀堂で、10代藩主鍋島直正の教育係をしていました。蘭学というは世界一統のことを極め知ること」と言ひ、「経済の助けにもなるべきなり」と主張しています。天保5年（1834）佐賀に医学寮を作り、島本良順を寮監にしました。

良順は長崎で通詞にオランダ語を学んで、寛政の末に佐賀の蓮池に戻つて開業します。開業後、伊東玄朴、大庭雪齋らを育て、佐賀の蘭学の父といわれる人です。

牛痘取り寄せを進言

天保2年（1831）には江戸詰め佐賀藩医に取り立てられ、天保4年に江戸に蘭学塾「象先堂」を開きます。安政5年には幕府の奥医師に出世します。

弘化3年（1846）、玄朴は天然痘対策として牛痘輸入を進言します。蘭学や西洋の科学技術に明るかつた藩主鍋島直正は、長崎在住の佐賀藩医植林宗建に命じオランダ商館を通じて牛痘を取り寄せました。大石良英らが実験に実験を重ね、「これなら大丈夫」という段階になつて藩主の子供に種痘。江戸で牛痘を受け取った玄朴も藩主の長女貢姫に牛痘を植えつけます。

◎問い合わせ先
神埼市役所 市長公室
☎ 0371-0102

あなたもふるさと学芸員 「神埼塾」の講演から⑥

農耕し、年貢納める侍

江戸時代の社会の特徴というか、統治の根幹は、兵農分離と、職業・身分の固定化にあります。武士は城下町に住み、生産活動には従事せず、もっぱら藩務に励む消費者であり、戦場では戦う侍です。商人は城下町付近で商売をし、冥加金を上納、農民は田舎にあって田畠を耕し、年貢を収めるのが普通でした。

ところが、佐賀藩では士農工商の身分制が非常に不明確で、城下の武士が刀を下げて商売をしているとか、農民が武士的な行動を取っているとか、そんなことがありました。それに加えて、士農商が混住していました。五人組という隣保班制は農民で構成されていましたが、佐賀藩ではそれに武士が入っていたり、商人が入っていたりしました。

鍋島藩では竜造寺の家臣も抱えて財政的に大変でした。米で禄を払えないため、下級武士には土地を配分し、「そこから上がる収入で生活しなさいよ」と、田舎に住むこともよしとする中世的やり方を行いました。だから、佐嘉城下に住むのは本藩でも上級の武士だけで、76%は佐嘉城外に住み、微禄で田畠を耕さざるを得なかつたようです。

弘化2年（1845）の記録によると、旧神埼町全体で本藩家臣117人、支藩などの家臣179人だったといいます。下級武士たちは当然田畠を耕作し、年貢も納めていました。

半面、士農混住の監視社会ゆえに、百姓一揆は起きなかつたし、微禄の武士をいっぱい抱えていたからこそ、いざという時に大規模な兵力を動員できたという利点もありました。

初代藩主鍋島勝茂の時代に、「山内刀指」という士分が脊振、三瀬、富士の山間部に約500人認められました。彼らは山間部に勢力のあった神代一族で、無祿でしたが、苗字帶刀（銃）が許されました。神代族を引き込むとともに、隣接する対筑前藩への軍事的役割も、山内刀指制度に含まれます。士農混住や山内刀指制度は、過去の怨念や武士の誇りを考慮した巧みな統治術がうかがえます。

割も期待しての武士扱いだつたとみられます。一方で、この地域には心遣（こころづか）という名の監視役も配置していました。山内刀指や筑前藩の情報収集が役割だつたと見られます。士農混住や山内刀指制度は、過去の怨念や武士の誇りを考慮した巧みな統治術がうかがえます。

脊振といえ、天和3年（1683）



勝利宝殿と石燈籠
脊振山の山頂付近の勝利宝殿と石燈籠

士農混住、一揆起きず



藩境争いの石碑と灯籠群の境目をどこにするかという問題です。元禄5年（1692）幕府評定所で、農民になりすました両藩の学者・論客が幕府役人の前で激論を繰り広げました。その結果、元禄6年10月、肥前側の主張が通り、山頂の弁財嶽は元通り肥前のものになりました。三代藩主の鍋島綱茂は勝利を記念して元禄10年、山頂に立派な石宝殿と48基の石燈籠を作り、それが今も残っています。脊振山に登られたら、一帯が山内刀指といいう士分の活躍の場だったこと、先人たちが必死に境界論争したことなどを思い起こしていただきたいのです。